

昭和23年「新制中学」発足当時の国語教育の実際

－ 広瀬町立広瀬中学校の場合 －

Japanese Language Education at Middle School in 1948 :
A Case Study of Hirose Middle School, Shimane Prefecture

田中 瑩一・菅本 至洋
Eiichi Tanaka and Yukihiro Sugamoto

I. はじめに

島根県は、昭和23年度より、「縣指定実験学校」を設けた〔「教育月報」（島根県教育研修所刊）昭和23年12月号7頁〕。「昭和二十三年度実験学校総括表」〔「教育月報」（昭和24年6月号12～13頁）〕によると、県下小学校12校、中学校11校が教科別に指定をうけ、それぞれの研究主題を設け、研究実践を進めていたことがわかる。

国語科の指定校は2校で、中学校は広瀬町立広瀬中学校、小学校は浜田市立松原小学校であった。その主題は、先の「総括表」によると、広瀬中学校は「生徒の実態調査と個人差の上に立つ国語学習活動」で、松原小学校は「如何にして国語の力をつけるか」であった。

「研究に於ける主要な事項」としてあげられていることは、次のようである。

| 広 瀬 中 学 校 | 松 原 小 学 校 |
|--|---|
| 「1 学習形態と学習活動の在り方 2 基礎能力の調査 3 テスト問題の作製（標準化の努力）」 | 「1 研究指導者委嘱 2 話すきく力養成上の問題 3 国語の実態調査 4 カリキュラムの問題 5 国語の効果判定」 |

〔昭和二十三年度実験学校総括表〕〔「教育月報」（昭和24年6月号12～13頁）〕 抜粋引用

松原小学校の研究に関しては、研究をまとめた冊子「本校の国語教育」〔昭和26年〕で知ることができる。この冊子にある、当時の佐田是重校長による「国語教育の歩み」という論考に、研究の展開が述べられている。それによると、研究の方向が「話すきく」から、作文や文芸教育へ移り、「国語教育による品性陶冶」ということを目指していったことがわかる。指導案は残っていない。

広瀬中学校の研究の歩みは、次のような資料で知ることができる。

- 1 「実験学校研究計画書」（昭和23年4月）
 - 2 「国語実験学校 第一回報告要項と指導案」（昭和23年12月）
 - 3 「国語単元学習の問題」（発表原稿）（同上）
 - 4 「昭和二十五年度 研究（広瀬中学校）」（昭和25年12月）
 - 5 「個人差を重んじた自主的学習活動の反省」（発表原稿）（同上）
- 〔1～3及び5は、藤原徳福氏所蔵（当時広瀬中教諭）、4は田中瑩一所蔵〕

1は、研究開始時にまとめられたものである。2は、昭和23年12月に「國語科実験学校第一回中間報告並びに研究協議会」を開いた際の資料である。3は、その時の藤原氏の研究発表原稿である。4は、中間発表から二年後に行われた研究発表会の紀要である。これには「国語單元表」「指導案」も含まれている。5は、その時の藤原氏の研究発表原稿である。

本稿は、これらの三年間の実践研究のうち、資料1～3を再録し、これらでうかがえる実践研究を分析しようとするものである。

II. 昭和23年度の広瀬中学校の国語教育実践研究資料

この節には、上記1、3の全文と2の一部を再録する。なお、漢字、仮名遣い等は原資料に忠実に再録するが、明らかに誤記と見られる部分についてはママ書きを付す。

1 「実験学校研究計画書（昭和二三. 四. 提出）

國語科実験校 能義郡廣瀬町立廣瀬中学校

「一 実験学校としての廣瀬中学校の本質

1. 民主的平和的文化國家日本を形成するために郷土社会の上に立ち、よりよい社会建設を目指し従来の教育に欠けていた主体性と合理性を重んじ積極的独創的教育活動の場である。
2. 新教育の目的目標を達成すべく生徒自体の幸福と福祉に基き各教科の困難なる諸問題をとりあげ眞剣に謙虚にその眞実を明らかにし、原理と実践面の開拓に挺身する“Tryout School”である。

二 実験校としての國語教育活動の目的

1. 國語教育の実践的探究をねらうもので廣い視野に立った國語教育の理想と郷土の実情に即し実施する計画をもって合理的能率的に運営する実験校であること
2. 学校の个性的なしかも至極具体的な研究焦点に向って精進すること
右目的を完うするため常に他校と連繫をとり、なかんづく能義郡教員組合國語同好会と協同的運営をなし國語教育実践面の開拓に率先挺身する。

三 國語教育活動の目標

1. 目標

- | | | |
|------------------|---|------------|
| a 明瞭な思考 | } | ことばの効果的な使用 |
| b 生き生きとしたことば | | |
| c よくわかるような書きあらし方 | | |
| d 読書のたのしみと理解 | | |

小学校六ヶ年間に積んで来たことばの能力、知識、習慣、態度を一層発展させ、眞実の世界に生き眞実のことばを語る社会人たらしめるために右の目標を立て生徒のもっている言語能力—それがおのずからのびて行く方向に教師の力と國語教材とが参与し生徒各自の自発性自主性を確立していく。

2. 学習活動要項

(一) 表現意慾を盛んにし、かっばつな言語活動をすることによって社会生活を円滑にし

ようとする要求と能力を発達させる。

(二) 自分を社会に適応させ個性を伸ばし、また他人を動かす手段として効果的に話したり書いたりしようとする要求と能力を発達させる。

(三) 知識を求めるため、娯楽のため、豊かな文学を味わうためというようにいろいろなばあいに応ずる読書のしかたを身につけようとする要求や能力を発達させる。

(四) 正しく美しいことばを用いることによって社会生活を向上させようとする要求や能力を発達させる。

a. 話すこと 「(聞くことを含む)」の鉛筆書きあり

対話(問答 会話 話し合い) 小グループの対話 学級における対話

独話 態度 話題の選び方の錬磨

朗読 〱 各機会に於て自己の心の思うままに表し、また他人の意見をよく
演劇 〱 「脱字「聞」か」き正しい思考判断の出来る練習をなす。

b. つづること(作文)

(1) 文を書くことの必要と価値を知り、またその興味を感じていく。

(2) 物を見る態度をやしなって日常の生活を豊かにしていく。 』(1枚目)

(3) 思うことや感じたことを、早くすらすらと書きうるような描写力を育てる。

(4) はっきりとわかりやすく、しかもきれいに書けるような書写能力をつける。

(5) 文をなおす習慣をつける。

(6) 手紙や日記報告などの実用文を書きこなせるようにする。

c. 読むこと(文学を含む)

(1) 理會力と表現力を高める。

(2) 文を読む技術に習熟する。

(3) 音読の芸術的形態として朗読を正しくする。

(4) 文学的趣味の養成

(5) 正しい言語感覚を養い、標準語を身につける。

(6) 新聞や雑誌をよみうる力をつける。

(7) 辞書参考書の使用さらに図書館の利用

(8) 書物の経済的効果的な使用

(9) 健康的なしかも経済的で効果的な読書習慣

(10) 読書の興味と習慣を身につける

d. 書くこと(習字も含む)

硬 筆

(1) わかり易くはやく書くことに熟達する。

(2) 與えられた紙面に全体のつりあいをうまくとって書けるような能力をつける。

(3) 氣がるに文字をかく習慣をつける。

毛 筆

(1) 毛筆を使用して文字を筆写する技能を養う。

(2) 日常生活に於ける文書通信の必要に役立てる。

- (3) 文字の筆順字形などの正しい知識をえる。
 - (4) 毛筆の文字美に対する鑑賞力をふかめ、かつその表現力を養う。
 - (5) 毛筆、すみ、すずり、その他用具の取扱いになれ それを愛用するようにする。
 - (6) 習字の学習にあたり、忍耐 努力 清潔整頓などの態度を養う。
- e. 文法
- (1) 國語のきまりを経験的に知って正しく美しく思想を表現するとともに、的確に他人の思想を理解する能力を得させる。
 - (2) 國語の構造を知る。
 - (3) 國語の特質をさとらせて國語に興味をもたせる。

四 実験学校経営の実際

1. 学習活動の場

イ 國語教育と学校経営

國語教育が言語の教育である以上学校活動学校行事のあらゆる場に、その活動の基盤を持つ。

- ロ 國語学習の場を学校内に止めず、社会にまで拡充する。

2. 現状

イ 校舎 広瀬町立広瀬小学校と共同使用

ロ 生徒及び教師

| | | | | |
|-------|----|-----|---|------|
| a 生徒数 | 一年 | 一六六 | } | 三九七名 |
| | 二年 | 一三三 | | |
| | 三年 | 九八 | | |

b 教員数 一四名 』(2枚目)

ハ 環境の充実

自発的学習に適する環境を整備充実し、その利用を充分にならしめる。

a. 図書室の経営拡大

- (1) よいよみものを整備する。
- (2) よい参考書、よい辞書字典類を備える。
- (3) よい参考資料を蒐集する

b. 図書館の活用

郡図書館、町図書館図書活用

ニ 学習の立脚点

- 1 人間のあらゆる活動にまたがっており、その時その場所に応じて変化に富んだ指導の手を加えたい。
- 2 他教科、特に社会科との連関が深く、学校生活の諸経験に於てことばの生活を実行する。
- 3 家庭その他一般社会生活の諸体験との連関が深く、その方面に於ても、ことばの生活を深める。

ホ 学習のすがた

- 1 あくまでも生徒の自発活動を重んじ、生徒の独自学習より相互学習への学習形態を充実する。
- 2 家庭に於ける独自学習図書館等を利用した生徒各自の学習の結果を持ちより班別に研究討議をなすことにより各自の理解を深める。
- 3 各班別に研究を終えた学習内容は学級の共同学習にうつし益々各自の研究を充実させる。
- 4 班別に行われる討議並に学級の共同学習により思考力発表力を十分に練る。
- 5 独自学習相互学習共同学習の各機会に於て十分に個性を伸ばすよう指導の手を加える。

へ 学習指導の重点

- 1 自発的創造的学習
- 2 計画的学習
- 3 生活的体験的学習
- 4 環境に結ばれた合理的協同的学習
- 5 個性に立脚し能力に合致した学習
- 6 興味ある学習により読書意欲の高揚

ト 教材単元

- a. 詩歌 俳句 童謡を中心としたうた教材
- b. 随筆 エッセイ 報告 日記 手紙 論説を中心とした思索教材
- c. 童話 傳説 笑話 世界的小説を中心とした物語教材
- d. かげ絵 よびかけ ラジオドラマ シナリオ 謡曲 狂言を中心とした演劇教材
- e. ことばの働きを自覚し、ことばそれ自体の使命をきわめていこうとする面
 - ・ことばあつめ
 - 標準語の研究
 - 方言調査（郷土中心）
 - 訛音調査（ ” ” ）
 - ・國語國字の問題
 - ・文法

』（3枚目）

4. 本年度の研究計画の重点（昭和二十三年度）

イ 生徒の國語学習活動実態調査

- a 読書力の調査
 - i 朗読する力
 - ii 漢字をよむ力
 - iii 内容をよみとる力
- b 書写能力の調査
 - i 正確さ
 - ii 速度

- iii 漢字をかく力
- c 表現能力の調査
 - i 文構成の力 話す力 つづる力
 - ii 語いの豊かさ
- ロ 國語学習個人調査原表の作成
 - a 基礎調査の実態を記入し指導の基盤を明らかにする。
 - b 基礎能力、計画する力、討議する力の伸びゆくすがたをあらわす。
 - c 孝級の傾向調査表へ展開
- ハ 教材研究 各科との連繫 学習指導の方法 学習効果の判定 自由研究に於ける國語学習活動の問題等につき職員研究会を持つ
- ニ 生きたことば眞実のことばの発表訓練
- ホ 読書力文字力の育成
- ヘ 自発的自主的な学習訓練
- ト 施設
 - a 図書室の充実をはかる
 - b ラジオ放送の利用をなす
 - c 学校新聞を発行する
 - d 研究発表演劇発表会をもつ

5. 本年度月別計画

| | 生徒研究計画 | | 教師研究計画 |
|-----|---------------------------|---|--|
| 四月 | 研究計画樹立 実態調査 | 興味の上 に立つ自 発的自主 的学習活 動の在り 方を自ら 修得す | 研究計画樹立〔「学習指導要領研究」鉛筆書き込み〕 教材研究学習活動系統案研究 |
| 五月 | 実態調査 | | 家庭訪問、個性調査 校内研究授業（学習形態の問題） （国語同好会研究会） |
| 六月 | ことばあつめ | | 実態調査の上に立つ研究問題討議 学習効果判定の問題研究 |
| 七月 | 生徒発表会 （研究発表） | | 他教科との関連問題研究 反省会 |
| 八月 | | 自主的独 創的國語 学習確立 期 | 教員修養会 学習心理の問題研究 |
| 九月 | | | 校内研究授業（表現の問題） |
| 十月 | | | 研究協議会（國語学習の諸問題） 講師 |
| 十一月 | 生徒発表会 生きたことば 眞実のことば | | 演劇の研究 |
| 十二月 | | | 反省会 |

| | | | |
|----|---------------------|----------|--------------------|
| 一月 | 読書力書 写力実 力充実期 | 図書館活用の問題 | [鉛筆書き込み 「文集作製」] |
| 二月 | | 校内研究授業 | |
| 三月 | | 反省会 | |

』（4枚目）

2 「国語実験学校 第一回報告要項と指導案」

(1) 「3. 日程」

| | | | |
|------------|---|-------|-------------------------|
| 1年1組 藤原教諭 | } | 時 | |
| 1年3組 天野教諭 | | 9、00 | 10、00 (同時実施) |
| 2年3組 中津教諭 | | | 9、50 |
| 研究発表(中間報告) | | 10、00 | 11、10 |

| | |
|-------------------|--------------|
| 挨拶 | 学校長 |
| 学習能力基礎調査と生徒の自主的学習 | 天野教諭 |
| 単元学習の問題 | 藤原教諭 |
| 国語学習とシナリオ | 中津教諭 |
| 研究協議会 | 11、20——12、00 |
| (晝食 休憩) | |
| 研究協議会 | 1、00——2、00 |
| 講演 | |

国語の単元学習について(会場2の3教室)

講師 縣立教育研修所主事 須田正平先生

(2) 学習指導案と発表要項

第一学年国語科学習指導案

(12月7日 第一校時)

指導者 藤原徳福

教材 雪もちの竹(中等国語一(2)五課) 教材分類 第二思索記録のむれ

学習の基盤

1 単元成立の意義

敗戦を契機に日本は根本的に出発しなおした。自由、平和、文化、そして幸福を求める人間本来の要求より出発して理想的な文化国家をめざして進んでいる。戦前より戦後へのあまりにも厳しい思想の転換に我々は思想的に非常に混乱した。中学校の生徒もそれを如実に体験して来た。そこには反省があり進歩向上もあった。

この教材は戦後おける山本有三氏のラジオ講演の原稿でラッドの意見を引用し日本人そのものについての根本的な反省を促し更に人間として正しく生きる態度を示し雪に耐える竹に例をとって日本人の今後のあり方を示した暗示深い文章である。

程度はともかくとして思想の激変を体験した生徒には必ず感銘をあたえ幾多の問題を提供するにがいない。時あたかも国民注視の中に戦争犯罪者に対して刑の宣告がり生徒の関心も、その一点に集り学級新聞においては真先にとりあげられた。この事実

こそ一層生徒に本教材学習の必要性を感じさせ問題を提供しその解決の必要を迫るであろうと予想される。

しかしこの教材はその性格よりして内容は非常に抽象的理論的であるので取扱いによっては学習活動を不活発にし理解さえ得させない結果となるおそれがある。そこに本単元の指導上の問題点があると思われる。即ちその抽象的なものを如何に具体化して理解させそのために如何に活発に言語活動を営ませ、それを如何に具体的に日々の生活に生かさせるかということが本単元学習のポイントである。

一の一クラスの生徒をみるに、発表力乏しく、又能力テストの結果によっても明らかかなように長文読解の能力は低く、知能テストの結果によると知能偏差値の平均は男子44に対し女子36という全校で男女比の最も大きいクラスである。このような実状であるから本単元学習にあっては特に個人的指導ということ念頭におき一斉の学習よりもグループ学習に重点をおきたい。それは一斉相互学習におけるグループにおいての生徒の学習活動が、より自発的であり、より活発であるということが予想されるからである。

本単元を学習することにより生徒の思考能力は〔四字分空白〕洗練され言語活動は漸次活発になって行くであろう。

2 目標

- (1) 「雪もちの竹」の内容を正しく把握する(単位4)
- (2) 日本人の長所、短所、及び今後の生活態度のあり方について話し合う(単位8)
- (3) 他人の講演話の内容を要約して記録する力を養う(単位6、11)
- (4) ことばの学習 』(以上2枚目)

3 学習の計画

第一次 興味の喚起 目標の設定 第一時

読み及び話し合いにより経験を想起し興味を起し更に学習の目安をたてる

第二次 個人学習分団相互学習 第二、三、四時 ー本時・第三時ー

○生徒が自主的に自分の問題を解決する。各グループは話し合いで分団学習目標を作り計画をたて問題を解決する。教師は相談相手となり目標を達するよう指導する。

○予想される学習活動

教材内容を相互研究により正しく把握する

- ・不明字句を辞書や参考書で調べる。
- ・〔判読不明〕
- ・話のすじをまとめる。
- ・一人が読むのを聞いて、その要点を記入する。
- ・この講演の目的について話し合う。

日本人の気質について話し合い、今後の生活態度のあり方を討議する。

- ・ラッドの意見を批評しながら日本人の長所短所について話し合う。
- ・敗戦の現状を見つめ日本人の気質について話し合う。

- ・「人間として最も尊いこと」について話し合う。
- ・「人間は一体何のために生き、何のために死ぬのか」ということについて話し合う。

講演内容の組立て方、他人の話の聞き方について研究する。

- ・簡単に講演の原稿を作りそれを発表し討議する。
- ・一人の話をみんなで聞き要点をノートしそのまとめたものについて批評し合う。
- ・ラジオ其の他で聞いた話で印象にのこっていることを発表し合う。

第三次 一斉相互学習 第五時

各班で学習したことを発表し、それを批評討議し必要があれば教師が補足し学習事項の整理確認をする。

4 資料準備

辞典類、新聞の論説切り抜き等

』(以上3枚目)

二、学習の実際

本時 第二次第三時(第一次第二次二時略)

| 学 習 活 動 | 指 導 要 項 |
|---|--|
| 1 分団別本時の目標樹立 | ○議長への注意(確認させる) ・班全員が意見発表すること ・時間内に一つのまとまりをつけること ・各々の意志が班全員に徹底するように ・最後に本日の学習事項を確認すること ・ことばに注意すること |
| 2 学習活動 ・ラッドの意見を批評しながら日本人の長所短所について話し合う ・敗戦の現状を見つめて日本人の気質について話し合う ・「花は桜木人は武士」ということについて話し合う ・「人間として最も尊いこと」について話し合う ・「人間は一体何のために生き何のために死ぬのか」について作者の意見を話し合う ・今後の生活の態度について話し合う ・作者は雪もちの竹にどんな意味を持たせようとしているかについて話し合う | ○必要な助言 ○各班の目標を確認し記録する ○議長の指導 ○各班の相談相手となりながら目標を達成するようヒントをあたえる。 ○各班の学習活動の状態を見て要点を記録する ○個人の学習活動を見て特記すべきものから順次国語学習[一字分不明]活動記録表に記入 |
| 3 本時のまとめ | ○学習事項の確認と指導 ○各班のまとめの状態を調べて記録する |
| 4 次時計画の打合わせ | |

三 評価

- 1 ペーパーテストによって「雪もちの竹」の文章をどの程度理解したかをみる。
- 2 相互学習中の話し合いの状況を観察して話す力の変化をみる。

- 3 話の聞き方がどう変わったかを観察する。
- 4 ノートによって書く力、文法について観察する。 』(以上4枚目)

第一学年國語科学習指導案 (12月7日第一校時)

指導者 天野正己

教材 雪もちの竹 (中等國語一(2)五課教材分類第二思索記録のむれ)

一 学習の基盤

1 単元成立の意義

悲惨な破壊戦争の後文化國家確立を期して進む日本の現状を毎日の生活にひしひしと体験しつつある中学生が [一字空白] この山本有三氏のラジオ講演を如何に聞き明日への生活を如何に開拓するであろうか。 [一字空白] 本教材は我々日本人の道義心の在り方についてきびしく過去のあやまちを反省批判し更に一つの道しるべを示している。時あたかも毎日のラジオと新聞は戦犯処刑の報道にひたすら力をそそいでいるのである。中学生にとってもこの時ほどこの文を味わい深くよむ時はないであろう。

ここに本教材を以て学習する大いなる意義を見出すのである。

本学級の生徒は知的に相当な個人差を有し学習能力も特に長文讀解口頭発表の面に劣っている傾向はあるが幸い一学期以来主として自主的学習の態度を練ることに力を注いで来たので興味深く学習を進めるようにはなつて来ている。

書かれている内容を深くよみとりくわしく語る学習であらしめたい。

2 目標

- (1) 山本有三氏の講演内容を正しく把握する (単位 4)
- (2) 日本人の氣質について討議する (単位 8)
- (3) 他人の講演、話の内容を要約して記録する力を養う。(単位 6、11)
- (4) ことばの学習

3 学習の計画

第一次 独自学習と相互学習

- ・学習目標の設定と本文のよみ

(第一時)

第二次 分団相互学習

- ・山本有三氏の講演内容を要約し相互研究をなす。
- ・日本人の氣質について各自の体験をもととして話し合う。

二
(第・時)
三

よみと
ノートの
検閲

第三次 一斉相互学習

- ・山本有三氏の講演内容を深究しこれをもととして日本人の氣質について討議する。
- ・郷土の町民性、縣民性等をしらべて発表する。
- ・他人の講演の聞き方について討議する。

四
(第・時)
五

本時…第四時

4 資料

辞典類。参考文献 (各國國民性のわかる図書) 』(以上5枚目)

二 学習の実際

(第一次・第二次畧)

| 本時（第四時）の学習活動 | 予定せる中心問題 |
|--|--|
| <p>1 本時学習目的の確認 各班ごとに話し合った内容につき本時学習活動計画樹立。</p> <p>2 本文のよみ。</p> <p>3 第二次に於て学習した事項をもとにして話し合い本文の内容を正しく把握する。 △よみについての不審箇所解決 △講演内容のほね、及び中心思想について討議 ・要約して簡単に発表する態度を練習する。 ・中心思想を明確につかむよう指導する △日本人の気質を中心に國民性の反省批判 ・ラッドの見方について生徒の体験も話させ長所短所をはつきりさせる。 ・我が國民性を深く反省させ今後の心構えをはつきりさせる。</p> <p>4 本時のまとめと次時への発展</p> | <p>△この講演はいつ、どんな方法で行われているか。</p> <p>△どんな内容の講演か。 △要点はどこか △ラッドの見た日本人の気質観 △日本人自体の反省 △作者は何にたとえて日本人の気質のある姿、あらねばならぬ姿を述べているか。</p> |

三 評価

- 1 正しくよめたか。(よみの検閲)
- 2 内容が正しく把握出来たか。(ノートの検閲 相互学習の発表)
- 3 活潑に積極的に討議に参加するか。
- 4 他人の発表を正しく聞くことが出来るか。
- 5 記録は要領よく早く出来るか。
- 6 本文中のことが身についたことばとして発表されたか。 』(以上6枚目)

第二学年國語科学習指導案 (12月7日第一校時)

指導者 中津眞琴

教材 少年の日の思い出(小説の味わい方)教材分類第三物語のむれ

一 学習の基盤

1 單限成立の意義

乱れた世の中に在つてもすれば、すさみ勝ちになる生徒の日常生活に於て、すぐれた本を讀むと云うことが、立派な絵や美しい音楽を味わうのと同じように大切な事と思う。

〔二字空白〕又戦後の日本に恰も雨後の筍のように多数の書籍が書店にはん乱してゐるが果して良書と銘うっているものが幾割あるだろうか非常にうたがわしい。

又生徒の讀書状況を見るに十月に行った本校の讀書調べによつても、当学級の讀書数千百四十冊と云う相当な数であるが、その内容及び讀み方を検討して見た場合まだまだ指

導の余地が残されている。

そこで本課を学習することによって小説の味わい方をとりあげ学級で協力して反省検討して、よい本の選び方、よい作品の味はいい方と、さらに読書への関心と興味とを高める一助としたい。その方法として本課の内容描寫、表現、文の組立等を研究して文学作品が如何に香り高いものであるかを体験させ、附随的に創作発表等の技術も養う。

2 目標

- (1) 物語のすじと物語の中心になることがらを把握する。(単位 4)
- (2) 作中人物の性格をつかみ、作者の心理描寫について話し合う。(単位 4. 15)
- (3) この作品のすぐれているところを話し合う。(単位 8)
- (4) 短篇小説のすぐれた作品を集める。(単位 4. 5)
- (5) 短篇小説について話し合う。(単位 8)
- (6) シナリオ風に書きかえて見る。(単位 13)

3 学習の計画 (学級学習は五時間)

第一次 独自学習と相互学習

- ・全文を通讀する。短篇小説のについて語り、讀書意欲の向上をはかる。次に学習目標を話し合ひによつて定める。 …第一時

第二次 分団相互学習

- ・夏季休暇等に生徒が實際行った経験を想起させて本課の中心事件を構成している。蒐集と云う事が、人を魅惑する事や本課の少年の熱情的なこと等を取り上げて話し合う。
- ・本課の中心になっている「少年が熱情のあまり、友人の蒐集物を盗んだ事件」を話し合いによつてつかむ。
- ・文中人物の性格を考へるそしてこの文ではどんなに描寫されているか、ぬき書きしてしらべる。』(以上7枚目)

第二時

第三次 分団相互学習

- ・本文を味讀してこの課の短い文がどんなにまとまっているかしらべる。組立方
- ・今まで讀んだ小説(文学書)と較べて見る。
例 藤村「落ち葉」ツルゲーネフ「散文詩」芥川龍之助「みかん」志賀直哉「城の崎にて」等
- ・この文をシナリオ風に書き換えて見る。(課外をふくむ)

第三時

第四次 一斉相互学習

- ・分団相互学習をまとめる。(分団相互学習形体をとく)
- ・各自のまとめを話し合う。
- ・シナリオの発表。
- ・文のすじを話す。
- ・感想を話す。

四
第・時
五

4 資料

本時…第四時

二 学習の実際 (第一、第二、第三次畧) 第四次(本時)

| 学 習 活 動 | 指 導 要 項 |
|--|--|
| 1 蒐集について各自の経験を話す。 2 本課の少年の熱情的なところがどう書いてあるか、発表し話し合う。 3 この課の中心をなしている事件について話し合い、まとめる。 4 文中人物の性格と心理的な描寫の話し合い a 主人公の心持の表し方 b エミールの性格 c 少年のエミールに対する氣持 d 少年の母の性格、少年に対する心づかい 5 この課全体のストーリーをまとめて見る。 | 1 自分の経験を面白く、皆に解りよく発表させる。蒐集のもつ魅力を想起させる。 2 どんなにこの少年は熱情的であつたかを羅列して見る。・板書 3 熱情→盗み→後悔の経緯をつかませる。 4 多くの生徒の考えを発表させる。人物の性格、いだいた感情、心づかい等をつかむと、同時に描寫法を研究する。 要点板書 5 面白く、要領よく話す。 |

三 評價

- 1 讀書により正しく讀みとるかをしらべる。
- 2 物語のすじと中心になることがらを正しく把握したか。
- 3 作中人物の性格をつかんでいるか。作者の描寫をどう理解しているか。
- 4 この課のすぐれた所をどれだけ理解したか。
- 5 他の作品をどう讀んでいるか。また今後の讀書生活がどう進歩して行くか。
- 6 ノート及び、提出物により書き方、理解の度を知る。

』(以上8枚目)

國語研究發表要項

教諭 天 野 正 己

題目 学習能力基礎調査と生徒の自主的学習

一 実験学校としての歩み

二 生徒実態の科学的把握に立つ国語教育

科学的なる生徒の実態把握

生徒の生きた実態を基盤とした計画の樹立

三 生徒実態把握の三重要点と本校の実績

(1) 知能測定とその結果

(2) 学業成績測定とその結果

a 学習能力テスト

國語習得の程度を測定する方法の一般的分野とその測定法

イ 表現の技術

ロ 各分野における語彙

ハ 読解力

b 学業成績の評価

国語学習活動記録表

3 国語学習環境の調査

a 読書傾向調査

b 図書館、貸本屋の利用状況調査

c 家庭の蔵書調査

d 郷土の方言、訛音、アクセントの実態調査

四 興味の上に立つ自主的国語学習

① 自発的、自主的学習の基盤

② 国語学習の場

③ 本校の国語学習形態

a 目標の設定と学習興味の喚起

b 独自学習

c 分団相互学習

d 一斉相互学習

五 今後の歩み

』（以上9枚目）

〔10枚目の資料は「全校生徒知能偏差値品等表（昭和二十三年度）」「知能テスト学級男女別成績表」が載っている。これは省略する。〕

題目 国語単元学習の問題

教諭 藤原徳福

一 単元設定の理念

1 単元の意義

2 単元の設定

a カリキュラムの編成

b 単元の設定

二 本校における過渡期としての国語単元学習

1 一教材一単元法とその根拠

2 実態

a 輿水実先生の作業単元の考え方

b 実態

三 今後の課題

題目 国語学習とシナリオ

教諭 中津眞琴

一 映画シナリオ「カパチェッポ」を学習して

二 シナリオの創作とその指導

三生きたことば
四生徒と方言
五今後の課題

』(以上11枚目)

3 「國語單元学習の問題」

國語單元学習の問題

國語科における單元学習ということは、非常に大きなしかも早急に解決しなければならない課題であります。幾多の疑問が生まれ、私達も色々なやんでいるのであります。しばらく、本校の單元学習についての考え方と又実際やって来ていることをありのままご報告申し上げまして、諸先生の御批判を仰ぎ、御指導を賜りますようお願い申し上げます。幸い本日はわざわざ須田先生にお出でいただきまして、午後、先生からくわしく國語の單元学習についてのお話を承ることになっておりますので、私達の道が明らかになり、又諸先生の御批判は一層明確なものになろうと存じ、非常に喜んでいる次第であります。

一、單元設定の理念

1. 単元の意義

はじめに、大変おこがましく存じますが、本校の理想としている單元についての考え方を申し述べたいと存じます。

先ず、單元 (Unit) ということばについてであります、
「單元とは学習者に対して学習の目的とする主要な結果を最も効果的に実現することを得るように工夫された知識と経験の組織された一集合体である。」
というのが単元の定義として最も要を得ていると思います。

2. 単元の設定

(1) カリキュラムの構成

このような意味を持つ單元は地域社会に於けるカリキュラムの構成に基^つづくものでなければならぬと思います。一般的なカリキュラムの構成の順序は、

1 第一にカリキュラム構成の計画がどんなレベルのものであるかの決定と、この計画を遂行する人的組織の構成。

2 第二はカリキュラムの実施によって実施されるべき教育目的の研究と具体的な』

(以上1枚目)

教育目標の設定。

3 第三は教育の目的や目標を実現するための教育内容の全体的な構造に関する形式の決定。

4 第四は教育内容の選擇と排列

5 第五の段階がいよいよ教科課程に基く学習單元の設定とその展開に関する計画の樹立であります。

(2) 単元の設定

地域社会に立脚したカリキュラムもこのようにして構成されると思いますが、單

元の設定につきましては、今頃いわれています通り、スコープScope（必要と範囲）とシーケンスSequence（興味と系統）の交叉するところに単元をおくということであろうと存じます。そして設定の手順も今言われておりますように

- 1 単元の骨組みを作るような主な見出しの決定
 - 2 学習の永続性を保つために、基礎的なものを選択し適当な間隔をおいてそれをくりかえすこと。
 - 3 目標が達せられたかどうかを見るために然るべき間隔をおいてそれをくりかえすこと。
 - 4 個人差に応じたとり扱いを考えること。
 - 5 矛盾を除去し、調和しないところをはっきりさせるために、全体のコース・オブ・スタデーを編集すること。
 - 6 経験に基づいて単元の学年配当を改めること。
- 等であろうと思います。

このようにして地域社会に即したカリキュラムに於いて設定された単元こそ単元選定の条件、即ち、一、生徒が興味をもつ活動 二、能力にあうこと 三、学習のバランス 四、学習の連続 等に適うものであり、単元的方法の特質をよく発揮し単元学習の正しい在り方を自ら規定するものであろうと存じます。

二、本校における過渡期としての『國語単元学習』（以上2枚目）

1. 一教材一単元法とその根據

単元の設定につきまして、本校では以上申し上げましたように考えておりますがひるがえって本校の國語科における単元学習について申し述べたいと存じます。

地域社会に基くカリキュラムの構成は実は大きな課題でありまして、このようなカリキュラムは一朝一夕には出来上がりません。従って本校におきましても過渡的な段階として不本意ではありますが、最も無難な教科書に取材した一教材一単元法を採って参りました。最もバランスのとれた教科書の組織と内容を教材選択の範囲とする教科書法を發展させた方法で教科書の教材配列に従って単元を設定し、各教材に於いては出来るだけ、生徒の興味を喚起し生徒の生活経験を活かし、自発性を促す方法であります。私達はその根據としましたのは、学習指導要領國語科編に、「単元による方法は、児童生徒が解決しなければならないような問題をだし、児童生徒が問題を解くときのすべての経験、到達した結論、達成した結果をまとめていくことであると定義できるであろう。國語教科書の一課一課もじつはそうした作業単元を考慮において編集されている。」（一四七）

とあるのによったのであります。又、興水実先生は「國語のコース・オブ・スタディ」の中で、次のように述べておられます。

「単元によるやり方のねらいというのは、学習に機会と経験を与えることであるといえます。そして、今までの日本の國語教科書の一課一課もこうした目的をもって提出されているわけです。それは学習の材料であり、いろいろの言語活動がそれを中心としてなされることを予想しているのです。（略）だから、教科書の一課一

課は「われわれの意見は他の人々によってどのように影響されるか」という問題と同じように作業単位であるといえます。両者のちがいはどこにあるかといえば、一方は問題の形で出されているから、より自発的なものをふくむが、一方は与えられたものを読むことから出発す』(以上3枚目)

るという点です。」(一一一) 又別の所では

「國語教科書の各課も、これを単に読むだけでなく、そこに書かれていることについて話し合う、更に他の本について調べる。まとめて短い文にかく、同じような作文をかく、或いは劇にする、紙芝居にするというような、広い「学習活動」の上ですべて取り扱うなら、立派な作業単位であるといわなければなりません。」(一三三) と言っておられます。

文部省で作られた教科書は一課で一つの単元学習がされることを考慮に入れて作られているのでありまして、本校では、今一步進んだ単元学習をねらってはいますが、それをそのまま活用しているのであります。

2. 興水先生の作業単元の考え方

そして又、その方法におきましては、興水先生の作業単元の考え方によっております。即ち興水先生は、単元の分類を

- 1 表現の立場から表現単位
- 2 教育の立場から学習構成単位
- 3 言語の立場から支持単位

と、この三つに分類されています。

(1) 表現単位は、

- 一. 詩情表現のむれ—童謡、童詩、抒情詩、和歌、俳句等
- 二. 思索記録のむれ—手紙、日記、隨筆、試論、報告、論文等
- 三. 物語のむれ—童話、寓話、神話、傳説、口碑、物語、小説等
- 四. 演劇一般のむれ—子ども遊び、影絵、よびかけ、人形芝居、こども芝居、ラジオドラマ、詩劇、謡曲、狂言等

(2) 学習構成単位は、

- 一. 読みかた(文学をふくむ)五単位
1 音読(朗読をふくむ) 2 黙読 3 辞書使用 4 読書法 5 図書館利用法(図書選擇)』
(以上4枚目)
- 二. 話し方(聞きかたをふくむ)五単位
6 聞き方 7 対話(挨拶をふくむ) 8 討議 9 独話 10 劇
- 三. 作文四単位
11 記録(日記) 12 手紙 13 創作 14 新聞編集
- 四. 書き方(習字もふくむ)三単位
15 表記一般 16 硬筆(鉛筆ペン) 17 毛筆(鑑賞もふくむ)
- 五. 文法三単位
18 はなしことばの文法 19 口語法 20 文語法

(3) 支持単元は、一発音、文字、語彙、文法

このように分類されて居り、そして作業単元の決定において

- 1 作業の性格を決定するものは表現形態即ち表現単元
- 2 作業の負擔を決定するものは言語量即ち支持単元
- 3 作業の地位を決定するのは学習部門即ち学習構成單位

とされます。

3. 実態

今日のつたない授業におきまして、お手もとにお配りしました指導案に、例えば一のクラスの教材「雪もちの竹」の次に「第二思索記録のむれ」と書いておりますのは、この教材が表現単元の「第二思索記録のむれ」に属することをあらわしたものであります。又、目標の「一、雪もちの竹の内容を正しく把握する」の次に(單位4)と書いておりますのは、この目標が学習構成單位の「一、読みかた」の「4 読書法」の学習をねらったものであることをあらわしたものであります。

又、単元の構成におきましても本材は、現在言われております1必要のたしかめ2単元の概観3目標の設定4資料の蒐集5動機化6作業段階7効果判定という方法に準據しておりますが、教科書を主教材にとって学習を進めておりますので、教材と生徒の』 (以上5枚目)

能力の程度のギャップにつきましては、現在苦しんでいる問題であります。

しかし、表現の裏に理解がなければならないことからして、又、主教材を与えられた教科書に求めております現在におきましては、教材を読んで理解することが重要であると思います。本校で一つの単元学習中に読みと調べの検閲をしておりますのも、一つはそこをねらっているのであります。文部省の石森先生は、

「教科書が國語学習というものにどういう位置になるかということを考えていただきたい。これは單なる手がかりだといってやらないでもいいとか、これは順序をかえてもいいとか、單に子供が興味をもつものだけをやってほかのものは止めてもいいというようなことをいう人もある。しかし、國語教育の性格は、これは社会の体系によって裏付けられるものであり、それから教育体系によっても裏付けられるように、もちろん子供のほうは家庭教育というものによって基礎づけられたものであって、それを総合して編修された、この教科書を使用することが國語学習の最も近道である。また能率的のものであり、価値があるというふうに考えているのです。新しい國語教科書の活用利用という点を強調した指導過程、指導型態というものが打ち立てられて欲しいと私は念願している。」(コトバ五月号)このように言っておられます。教科書に取材して単元学習を進める現段階におきましてよくその意味が説明されてあると考えます。

本校における一教材一單元法の結果をみますに、漸次に効果があらわれて来たように思います。私の場合をみますと、最初は、單に教材の深究に終わった感がありましたが、だんだん言語活動がさかんになり、自立的な作業、創意の面が現れて来ました。

例えば、一年の一分冊「八 初夏の奈良」の所では、絵はがきを持って来て、情景を話し合っていたグループがありました。又、郷土の名所案内の作文をつくった生徒もありました。「十 末ひろがり」では、各グループと』（以上6枚目）

も狂言を現代語になおして、対話をやっており、中には身ぶりを入っていた班もありました。又、二分冊の「三 心の小径」の所では、相当くわしい郷土の方言の調査をした生徒もありました。二年生の「八 カパチェッポ」では生徒達はそれぞれいろいろの物語を集めて不完全ながらもシナリオをつくっていました。中には、創作してシナリオにしたものも数人ありました。

これらはその結果の一部ですが、これが若し広瀬という地域を基盤とし、生徒の実態より、生徒の生活より出発した教材であったならば、その活動はどんなに活発で、有効であったろうかと思えます。

三、本校における今後の國語単元学習の課題

1、國語科の研究課題

地域社会におけるカリキュラムの構成、これは今後における最も大きな課題であると存じますが、課題が大きいだけに、基盤がしっかりしていなければなりません。したがって相当の期間を要するものと思われれます。そこで私たちに与えられます手近かな問題は、研修所の渡辺先生の御ことばによれば、一教科の國語科として生活言語指導の単元構成へ全力を注ぐことであると存じます。

文部省の「教育心理」の國語の心理の項に、

「要は、生活に即した場で、児童が表現の意欲を感じているときに、適切な指導を行うことが成功の基である。」とあります。

その適切な指導を行う為に自ら次のような課題が本校に与えられると思えます。

- 1 國語科に於ける社会的要求とは何か。
- 2 生徒の言語活動の実態—いかなるものを生徒は必要と考え、興味を感じるか。
- 3 國語の学習に体系が立てられるか。立てられるとすれば、どんな体系が妥当か。立てられなければ、どうしたらよいか。 』（以上7枚目）
- 4 國語教科書が生徒の國語学習に於いてどんな地位を占めているか。また、どんな地位を占むべきか。
- 5 國語科と他との関係はどうか。又國語が教科中に於いて占むべき位置は。
- 6 生徒の國語学習の実態はどうか。又どの程度のことが可能か。等

これらの問題を解決することは、とりもなおさず地域社会におけるカリキュラム構成への第一歩であると存じます。

何れに致しましても、何より必要なのは、生徒の実態を知ることであると思えます。興水先生は、わが國の國語教育の現状では單元的方法の実施上の難点は、各学年の言語発達の段階が十分調査されていない点にあることを指摘し、單元学習を実施して行く上の基本調査として、

- 1 言語発達（言語能力）
- 2 経験領域（言語生活）

3 興味ある話題

の三つを挙げておられます。本校におきましては、先刻発表がありましたように、既に基本的な調査を実施致しておりますが、更に検討に検討を加えて、より客観的なものにしたいと考えております。そして、この実態調査より出発して一步一步課題の解決に邁進致したいと存じております。

色々、とりとめのないことを申し上げましたが、今後の諸先生の御指導と御援助を御願ひ致しまして、國語單元学習における本校の遅々とした歩みの御報告と致します。』
(以上 8 枚目)

Ⅲ. 昭和23年度の広瀬中学校における國語教育の特質

1. 「実験学校研究計画書」について

この計画書は、B 4 判 4 枚に縦書きで書かれ、「一 実験学校としての廣瀬中学校の本質」「二 実験校としての國語教育活動の目的」「三 國語教育活動の目標」「四 実験学校経営の実際」という章立てになっている。但し、「四」は印刷が不鮮明で手元の資料では解読できないが、前後の関係から営本が「四」とした。また、「B 4 判 4 枚」であるが、それぞれに「(1)」「(2)」「(4)」「(5)」と下部中央に不鮮明ながら印刷され、右肩には、鉛筆書きで「1」「2」「4」「5」とある。従って原資料の 3 枚目が失われているものと考えられる。「四 実験学校経営の実際」は「四-1 学習活動の場」「四-2 現状」「四-4 本年度の研究計画の重点」となっているので、「四-3」に相当するものが失われているものとするのが妥当であろう。「四-3」には、恐らく、現状の問題点を踏まえた研究の指針のようなものが記されていたであろうと想像する。

この計画書の内容をみると、民主的國家建設に資する「真実のこぼを語る社会人」を育てるために生徒の言語能力を伸ばしていこうとする広瀬中の意気込みが感じられる。また、「三 國語教育活動の目標」や「三-2 学習要項」の記述内容は、前年(22年)の12月に出された学習指導要領にほぼ準拠したものであるが、目標に「a 明瞭な思考」とあるところに広瀬中の特色が認められる。(これについての論述は別稿を用意中である。)

「四-2-ホ学習のすがた」には、広瀬中の学習方法の考え方がよくあらわれている。「独自学習」「相互学習」「共同学習」「研究討議」という言葉が使われていることから、新しい教育への取り組み方がわかるが、何より「生徒の自発活動を重んじ」ることや「思考力発表力を充分に練」って「個性を伸ばす」ということは、個人としての人間を育てていくということで、戦前の教育観や子ども観の枠組みでは到底考えられないことであり、ここに新しい教育観子ども観人間観の息吹が感じられる。

また、家庭学習における「独自学習」(個人学習)から教室における「相互学習」(小集団学習)、さらに「共同学習」(一斉学習)という学習の展開方法と各自の「研究」をもとにした討議法による学習方法とがとられようとしていたことがわかる。このグループ学習と討議法は、同時代の他校の実践にもみられ、二十年代前半に最も活用された学習方法の一つである。広瀬中でもその新しい教育の方法を重視していたことがうかがえる。

さらに、「四-4 本年度の研究計画の重点」「四-5 本年度月別計画」では、この研究

の堅実さが浮き彫りになっている。それは、研究主題を受けてでもあるが生徒の実態調査から始めようとする姿勢や、月別の研究計画を立てて進めようとするところからわかる。特に、注目したいのは、「國語学習個人調査原表」で、現代という個人カルテのようなものと考えられるが、それをこの時点で実践化しようとしていることは非常に先進的な試みとして評価できる。

2. 「國語実験学校 第一回報告要項と指導演」について

本資料は、B4判横書き、表紙を含め12枚からなる。表紙には表題と、卵を割って生まれ出てきた雛のイラストがあり、「新生」というイメージが伝わってくるものである。一枚目には、「國語科実験学校第一回中間報告並びに研究協議会案内」とあり、「1、期日 12月7日（火）午前9時より午後4時まで」「2、会場 広セ町立広セ中学校」「3、日程」「4、会場案内」「5、電車・自動車時間表」が載っている。本稿には「3、日程」のみを再録した。

ここに在る三つの学習指導演の形式とは、「教材名、一学習の基盤〔1 単元成立の意義 2 目標 3 学習の計画 4 資料〕、二学習の実際（本時分の展開計画）、三評価」である。現在でもこれに類似した形式で学習指導演は書かれていることから、この広瀬中の形式はよく考えられたものであり、時代を超えた標準的なものであったと言ってよい。逆に、時代を色濃く反映しているのは、「単元成立の意義」や「目標」の内容である。「単元成立の意義」は、どれも先ず当時の世相とその中に生きている子ども（生徒）について述べてあり、言わば社会観から入っている。それから、明確な段落分けなどはないが、概ね教材、生徒の実態、学習指導の指針などが、順番は前後する場合もあるが述べられている。三つのものが微妙に異なるので、例えば教材観→生徒観→指導観のような構造化はできにくい、社会観→教材観・生徒観・指導観となっている。このように国語科の目標を社会観を基盤においてとらえるのは、言語の効果的な使用を目的とした当時の国語教育の特徴である。常に言語を使用する実際の場である社会に目を向けていたことがうかがえる。また、教室の学習が、現実の社会をも視野に入れていたことの表れである。

「目標」については、「話し合う」や「討議する」「集める」「書きかえて見る」といった活動目標が目につくことも、当時の活動中心の特徴が表れている。ただ、藤原氏の発表原稿に詳しいが、興水実氏の「学習構成単位」「支持単元」という考えを導入し、そうした言語活動を構成する要素（単位）や学習能力に注目しようとしていることは、非常に先進的な研究であったことの証である。

公開されている授業の中に「少年の日の思い出」（ヘルマン・ヘッセ）を扱った中津真琴教諭の学習指導演（以下「中津実践」）がある。この作品は昭和22年度教科書に採用され、現在にいたるまでなお教科書にあるものである。それからすると、この中津実践は、この作品の実践として最も初期のものに属する。「作品別文学教育実践史事典第2集中学校高等学校」（浜本純逸他編 昭和62年 明治図書刊）によると、「この教材で何を教えるか」については、戦後一貫して、〈盗みの中に主人公「ぼく」の姿と心とを読み取り、「『悪』がもたらす人間の悲しみや苦しさを受けとめていける柔らかい心を育む」という点に関して、ほとんどの実践記録は共通している。〉（菅原稔、同書38頁）とある。「授業の実際」としては、

大西忠治氏の実践（主人公が「自分で少年時代を終わらせた」物語として読む）、白石等氏の実践（「語り終えた後の場面を想像する」）、山田利彦氏の実践（「自分を責めさいなむ『ぼく』をとらえる」）の三実践が抄録されている。これらは、その究極を作品の主題の読み取りにおいた実践である。主題解釈もいろいろであるが、一例をあげれば、甲斐睦朗氏は「美しいちょうへのあこがれが強いためにかえってそれを裏切る行為を犯したほうが、精神面で少年と訣別し、やみをみつめる生き方を求める」（同書38頁）としている。

これらと中津実践とを比較してみると、主人公「ぼく」の熱情と、登場人物の心理描写とに注目し、それを読み取る点では共通しているが、中津実践の学習指導案には主題についての記述がない。即ち、中津実践は主題に到達することを目標とした実践ではなかったのである。

中津氏は「本課を学習することによって小説の味わい方をとりあげ学級で協力して反省検討して、よい本の選び方、よい作品の味はい方と、さらに読書への関心と興味とを高める一助としたい」と述べている。即ち、読書指導の一環として「本課の内容描寫、表現、文の組立等を研究して文学作品が如何に香り高いものであるかを体験させ、附随的に創作発表等の技術も養う。」ものであると単元の性格を規定している。これは、22年版の学習指導要領にみられる「(前略) 中学校の國語教育は、古典の教育から解放されなければならない。また、特殊な趣味養成としての文学教育に終わってもいけない。つねにもっとも廣い『ことばの生活』に着眼し、実際の社会生活に役だつ國語の力をつけることを目かげなければならない。」(同書97頁) という立場で、文学作品を扱う典型的実践であったといえることができる。つまり、作品を読むことが即主題の読みに収斂するような文学作品の指導とは異なり、「短編小説のすぐれた小説を集める」や「シナリオ風に書きかえて見る」など多様な言語活動が組み込まれていることからわかるように、中津実践は教材「少年の日の思い出」を包み込んだ形での読書生活指導的な単元学習であったといえることができる。

3. 「國語単元学習の問題」について

本発表原稿は「島根縣能義郡廣瀬町立青年學校」の野紙に万年筆（青）で書かれた8枚のものである。

この発表原稿における単元の定義は、「知識と経験の組織された一集合体」とある。「知識」は教材単元の目指すものであり、「経験」は経験単元の目指すものである。この両者を、「知識と経験」と結ぶところから、教材単元と経験単元の考え方の融合したものが広瀬中の単元観であったと考えられる。また、単元設定の道筋も「カリキュラムの構成」→「単元の設定」として、「このようにして地域社会に即したカリキュラムに於いて設定された単元こそ、(略) 単元的方法の特質をよく発揮し単元学習の正しい在り方を自ら規定するものであろう」と述べている。これは、広瀬中学校が当時のカリキュラム論に精通し、理想的なカリキュラム構成と単元設定こそが大事であるという認識をもっていたことの証である。事実、藤原氏の別の資料に「昭和二十三年度夏期講習要項/題目 地域社會學校の理念と実践課題/講師 石山修平」がある。藤原氏は、こうした講習に積極的に出席して、当時としては最先端の理論を研究していた。

しかし、広瀬中としては、そのような理想的な単元設定の在り方は知っていたが、現実に

はそうはいかず、次善の策として、教科書中心のカリキュラム構成、単元設定を行っていると言っている。一方、別のところで、学習指導要領の「国語教科書の一課一課もじつはそうした作業単元を考慮において編集されている。(同書147頁)」という文言や興水実氏の「国語教科書の各課も、これを単に読むだけではなく、そこに書かれていることについて話し合う、更に他の本について調べる。まとめて短い文にかく、同じような作文をかく、或いは劇にするというような、広い『学習活動』の上にすえて取り扱うなら、立派な作業単元であるといわなければなりません。(『国語のコース・オブ・スタディ』133頁)」などの発言を引いて、一教材一単元の理論的な妥当性を主張していることから、単なる次善の選択に止まらず、積極的な意味合いもあったと考えられる。石山氏の説く地域社会学校では、カリキュラムは経験単元のコアカリキュラムで編成される。コアになるのは、社会科であり、国語科の教科としての存在は中心から遠いものとなるし、教科の枠が曖昧になってくる。広瀬中の国語科としては、それでは国語科自体の存在理由が揺れてくると考え、石山氏の説に与することをしなかったのではなからうか。

広瀬中は積極的に一教材一単元の理論を採用したものと考えられる。そして、この学習方法が「漸次に効果があらわれて来たように思います。私の場合をみますと、最初は単に教材の深究に終わった感がありましたが、だんだん言語活動がさかんになり、自立的な作業、創意の面が現れて来ました。」(発表原稿)と藤原氏をして語らせるようになってきているのである。最後に課題として、「国語科の社会的要求は何か」、「生徒の言語活動の実態」、「国語の学習の体系とは」等6点をあげている。そして、それらの基底にある問題として、興水氏の「単元的方法の実施上の難点は、各学年の言語発達の段階が十分に調査されていない点」であり、「単元学習を実施して行く上の基本調査として、1言語発達(言語能力) 2経験領域(言語生活) 3興味ある話題」の三つの調査が必要であるという指摘を引いている。そして、それらの広瀬中での基本調査を「より客観的なものにしたい」として発表を終えている。

広瀬中では、言語発達の段階の調査によって研究に科学性や客観性が生まれると考えていたようである。言語発達がどうなっているかということは子どもの言語能力の問題であるから、これ以降広瀬中では生徒の言語能力の発達段階の解明を研究の対象とするようになっていったものと想像される。

また、この中間発表会については、当日の講師の須田正平氏が「教育月報」(昭和24年1月号)の『実験学校の歩み』(同書10頁)に次のように紹介している。「国語実験学校廣瀬中學の中間発表會に、十二月七日暁闇の一番汽車で出かけた。西は遠く益田から驅せ參ずる熱心な同志も加えて、終日みのり多い研究會であつた。／眞剣な國語人天野教諭の學習能力の基礎調査の報告である。まだ第一段階というところであるが、こうした難事業に身をもつて當られた天野教諭を中心とする廣瀬校の研究陣には頭が下がる。藤原教諭は國語指導とシナリオについてそれぞれ研究の報告があつた。生徒の學習活動では指導形態についての研究が積まれていて、一齊學習と相互學習が計畫的に公開されていた点と、分團による相互學習が活潑に行われている点はみごとであつた。／午後は國語の單元學習についてわたくしが講演する役目をひきうけていたが、協議會にきりかえて、單元學習を中心として二時間にわたる

熱心な協議が進展したのは愉快であった。なお能義郡國語同好會が高校も加えて結成され、安来高校の目次教諭が協議會を司會されたのも、高校と小中學との連携がうまく行っている点が望ましいありかたであると感心した。(以上須田記) (「學力検査尺度標準化の難作業／能義郡廣瀬中學校」)

研究報告で「藤原教諭は…」の文は「藤原教諭は國語單元学習の問題について、中津教諭は國語指導とシナリオについてそれぞれ研究の報告があった。」の意であろう。

須田氏は、廣瀬中が学習能力に注目して研究をしている点や学習形態を評価している。單元学習については、当初日程では講演が予定されていたのに、実際には行われずに協議となっている。そこでの、廣瀬中の考え（一教材一単元の單元学習）に対する須田氏の評価や参会者の評価は定かでないが、協議時間の長さから関心の高さはうかがうことができる。しかし、以後廣瀬中の研究関係の文書に、單元学習の問題は取り上げられない。

IV. おわりに

県の指定であるが、実験校の独自の取り組みがなされている。廣瀬中の国語科の三先生が、新しい国語教育の在り方を求めて、学習指導要領や当時の指導的研究者の著作や雑誌論文をもとに、研究を進めていったことがよくわかる。これまでみてきたように、昭和23年12月の中間発表において、廣瀬中の研究の方向性は定まったように見受けられる。

以上、本稿では廣瀬中学校の資料1～3について考察を加えた。資料4、5については別稿を用意したい。